

# つるみの風

つるみの風 第45号  
2021年9月25日発行  
鶴見聖契キリスト教会  
〒230-0074 横浜市  
鶴見区北寺尾 1-16-7  
TEL 045-572-0857

## 真の勝利者とはだれか

「行き合いの空」。少し時期は過ぎましたけれども、この季節にびったりな日本語です。暑さが一段落して秋へと向かう晩夏から初秋の頃、夏のモクモクした雲と、秋のうろこ雲や筋雲が同時に見える空のこと。抜けるような青空を背景に低空の積乱雲、バックに上層の筋雲という立体感と、夏と秋が行き合う語感のやさしさに、心安らぎます。ほのかなキンモクセイの香りに思わず深呼吸をし、店先に並ぶ津軽りんご、初物の柿などを手に取ると、長い長いコロナ行動制限のストレスをひととき忘れさせてくれます。皆さんいかがお過ごしでしょうか。

世相を大局的にバランス良く伝えてくれるメディアは、昔も今も新聞だと思っています。四コマ漫画とTV欄に始まり、社会面、地方版、スポーツ欄、家庭と健康、経済面、国際面、社説と投書欄、特報面、そして一面とコラム。あれれ、読む順序が逆でしたか？ 政権にもねる記事も参考になるので、ここぞという時にはコンビニで他紙購入。リアルな人間社会がどんな価値観で覆われ、動いているのかをつかみ、自ら「今日一日をどう生きるか」を位置づける。朝ご飯を食べながら読む新聞にしては深刻過ぎるでしょうか。

そんな新聞の分析力に舌を巻いたのが、先頃の九・一一米同時多発テロ二〇年でした。まるでこの二〇年を総括するかのような、アフガニスタンからの米軍撤退とアフガン戦争終結、元の木阿弥となった政変を見るにつけ、世界が強さと弱さの衝突に満ちていること、誰が強くて勝者なのか、わからない現実を思い知らされたからです。個人的には、あの国で誰もが尊敬し、凶弾に倒れた中村哲さんこそが、政治的には最も弱くとも真に強い勝者だったと思います。現地の人々とともに生き、砂漠を緑に変えたからです。手前味噌ですが、彼はキリスト者でした。



### ●表彰式の定番曲

前置きが長くなりました。突然ですが、表彰式で必ず流れる曲を皆さんご存知ですか？ チヤーンチャッチャチャーンチャンのアレです。原曲は、ドイツ出身で英国に帰化したバロック時代の大作作曲家、C・F・ヘンデルのオラトリオ「ユダス・マカベウス」で使われた「見よ、勇者は帰る」。勝者を称える曲として、競技会などの定番曲となりました。実はこのヘンデルのオラトリオ、紀元前一六四年にエルサレムで起こった「マカベア戦争」という、ユダヤ人にとっては忘れるこ

との出来ない事件を下敷きにしての出来事。シリアの王、アンテイオコス・エピファネスが権勢に乗じてイスラエルを侵略し、再建されたエルサレム神殿にオリンポスのゼウス像を持ち込んで、ユダヤ教徒を大迫害。ユダヤ教の祭司たちは迫害と冒瀆に激しく抵抗しました。そのリーダーが祭司ユダ・マカバイオスで、エルサレム神殿を奪還し、汚された神殿をきよめたのでした。これが「宮きよめの祭り」の起源で、現在は「ハヌカ」として毎年祝われています。

### ●なつめ椰子は勝利の象徴

表彰式にまつわる植物といえば、真つ先に思い浮かぶのが月桂樹の枝を編んだ月桂冠です。古代ギリシアのアポロン神が起源ですが、ユダヤ人にとって勝利のアイテムはなつめ椰子の枝。起源はまさに、ユダ・マカバイオス率いた宮きよめにあります。時代的には旧約聖書と新約聖書に挟まれた「中間時代」に起こったため、聖書に記録はないのですが、外典「第二マカバイ記」に「彼らは...なつめやしの枝を手にして、ご自身の場所が清められるよう道を整えてくださった方に讚美の歌を献げた」とあります。

なつめ椰子(デーツ)は乾燥した熱帯地方で栽培される背の高い木で、その実は甘くて栄養価が高く、砂漠の民にとって命の源、豊かさの象徴でした。実は今、この原稿を入力しながらドライフルーツのデザートを食べています。日本で買うとけっこう高いのですが、干し柿に似た味と食感ですね。イスラエル旅行のおみやげ定番

です。ですから、ユダ・マカバイオスより後の時代、イスラエルが時の支配者ローマに対して反乱を起こす度に、なつめ椰子の枝が刻印された貨幣が铸造されました。「ユダヤ人の国イスラエル万歳！」という国威発揚の象徴がなつめ椰子の枝と言ってもよいでしょうか。

### ●エルサレム入城となつめ椰子

時は紀元三〇年の春、都エルサレムで群衆が大挙してなつめ椰子の枝を振る大事件が起こります。一般に「エルサレム入城」と呼ばれる出来事です。主役は北部ガリラヤのナザレ出身イエス。政治と宗教を司っていた、当時のユダヤ指導者たちは、自分たちの地位を脅かし、支配者ローマが求める平穏な統治をかき乱すイエスの抹殺計画を公式に発動していました。

しかしイエスより一足先にエルサレムを訪れた「(超越の)祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに來られると聞いて、なつめ椰子の枝を持って迎えに出て行き、こう叫んだ。ホサナ(万歳!)。祝福あれ、主の御名によって來られる方に。イスラエルの王に」(ヨハネの福音書一二・一二―一三)。彼らはあの、異邦人に汚された神殿がきよめられた出来事を思い出し、ローマ帝国に支配され屈辱を味わうイスラエルを復興する「第二のユダ・マカバイオス」を、イエスに重ね合わせ期待していたのです。なつめ椰子の枝は、この出迎えに欠かせない必須アイテムでした。

ところが肝心のイエス、軍馬にまたがり颯爽とエルサレムに入城するかと思いきや、小さなろばの子の背に乗って、なつめ椰子の枝を振る群衆の歓迎を受けたのでした。愛嬌ある優しい顔をし、よたよたする子ろばに乗った革命者？ その不釣り合いな光景に、人々は旧約聖書ゼカリヤ書の一節を思い出します。「恐れるな、娘シオン。見よ、あなたの王が來られる。ろばの子に乗って」(一一五)。でも、群衆はもちろん、イエスの弟子たちでさえ、その関連性がわからなかったようです。ろばの子に乗る王？ 力や勝利を期待するなつめ椰子の枝こそが、自分たちの期待する救い主に相応しいと思ったからです。



### ●十字架の上から統治する王

この「エルサレム入城」が起ったのは日曜日で、木曜日が最後の晩餐、金曜日はイエスが十字架に架けられた受難日で、次の日曜日がイエス復活の日、現在のイースターです。イースター前の一週間、イエスの十字架の苦悩を想起する受難週が始まる日曜日を、現在では「棕櫚(なつめ椰子)の主日」と呼び、教会の礼拝で歌う讚美歌の定番は、讚美歌一三〇番。作曲C・F・ヘンデル、原曲は「ユダス・マカベウス」、あの表彰式の旋律です。十字架刑に向かうイエスを想起する受難週の始まりに似合わぬ華やかな曲調。歌詞はまさしく聖書のエルサレム入城記事です。つまり、

ヘンデルがユダ・マカバイオスの宮きよめを下敷きに作曲した「見よ、勇者は帰る」を、第二のユダ・マカバイオスと期待して群衆が熱狂的歓迎をした記事に重ね合わせ、イエスは実は武力によらぬ真の強者、勝利者、王なのだと伝えるメッセージなのですね。

それは、人類を悩ます罪と死に対する勝利、神に敵対する悪魔への勝利、神と人の平和を実現する勝利です。なぜなら、イエスの十字架と復活はそれらすべてを実現する神の逆説、人の目にはわからない神の仕組んだ仕掛けだからです。なぜ人類はいっになっても力で相手をねじ伏せ、武力で敵を殺し、自分が王となって支配しようとしたらむのでしょか。それが無益であり、決して真の平和をもたらさないことを、アフガニスタンを持ち出すまでもなく、歴史が証明しているではありませんか。

### ●なつめ椰子の枝を振る日

聖書の最終巻ヨハネの黙示録に、なつめ椰子の枝が登場します。「その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊(イエス)の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。彼らは大声で叫んだ。救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある」(ヨハネの黙示録七・九―一〇)。(裏面に続く)

